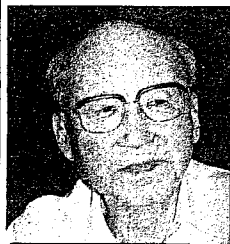


放射能との共存時代を前向きに生きる

肥田舜太郎

聞き手 守田敏也



ひだ・しゅんたろう 一九一七年、広島市生まれ。日本大学専門部医学科卒業。一九四五年八月六日、爆心地から六キロの地点で被爆。直後から被爆者救済・治療にあたり、〇九年の引退まで被爆者の診察を続ける。一九五三年、全日本民主医療機関連合会創立に参加。同理事。日本被団協原爆被爆者中央相談所理事長などを歴任。被爆の実相を語りつつ、核兵器廃絶を訴える。もりた・としや 一九五九年生まれ。フリーライター。

世界 SEKAI 2011.9

内部被曝の相談会の場で

肥田 三月一日の事故報道を見た瞬間に、大変なことが起こると思えました。私は放射性物質が、風に乗って届いている場所では全て、かなりの人が被曝していると思います。

暫くして福島市内からなど色々な人から電話がかかり、はじめ下痢だった人に口内炎がでたという。広島を経験では、放射線を受けた人たちの初期症状に、下痢をおこし、口の中がただれていくことがありました。次に鼻血があり歯茎からも出血する。喉からもたららたりました。その後腕に紫色の斑点(紫斑)がでてきました。この人たちは頭から原爆を受けましたが、死の灰で内部被曝もしています。後からの入市で内部被曝した人からも、下痢や口内炎や鼻血、紫斑などの症状が現れることがありました。だから今、出ている症状も放射線被曝の初期症状の可能性があると思います。

私に連絡を下さった方から、東京で被曝についての相談会に来て欲しいと頼まれ、私知っていることをお話しするから帰ったら近所の人に伝えてくれと、次のように話しました。「放射線が人間の体に被害を与えるやり方に二通りある。

まずは爆弾の破裂や原発事故などによって放射線が飛び出し、人間の体にもすごい勢いでぶつかることです。もう一つは放射性物質が風に乗って流れてきて、近所に落ちたものを、水を飲んだり野菜を食べたりして身体の中に入れることです。

肥田 後から出て来るのはぶらぶら病です。私が医師として患者を正式に診たのは、一九四六年一月に、山口県の柳井へ国立病院をこしらえて広島から患者を連れて行ったときでした。柳井にいた被爆者もおしかけてきた。その中に、被ばくをしてから家族のもとに帰って大事に看護されて、どんどん身体がよくなるはずなのに、ある日から突然、身体がだるくなりだした人たちがいました。その人たちが、かったるいというのだけれど、医師には病気がしくは見えない。それで帰れという、帰っても同じだから、入院したいという。

広島では私は戸坂村で、次々と運ばれてきて地べたに寝かされた被爆者を診ましたが、道具も無ければ薬もない。野戦病院みたいで秩序だった医療などできなかった。ところが病院を構えて患者を診るとなると、医者側の責任をもった対応をするようになり、カルテも作る。厚生省から患者について診たことを書かないようにという通達がきましたが、カルテには書かなくてもノートを作って、自分の気になる患者のことを書いていきました。「直接被曝のないもので、翌々日に広島市内に家族を探して入市、暫くすると、火傷も何も無いのに、夕方から身体が熱っぽくなって、翌朝、悪くなった」などです。

そうして何人も記録しているうちに、だるくなる状態が、発作的に起こることが分かりました。ある日、ちょうど喘息が始まるように発作的に始まり、動けなくなる。短い人は一、

肥田さんは広島原爆を受けた直後から、被爆者を診られはじめ、何千人という方を診察されて、原爆ぶらぶら病のことなどを説明されてこられました。またアーネスト・J・スターングラスやジェイ・M・グールドらの本を翻訳し、内部被曝の問題を明らかにするとともに、アメリカでも核実験や核施設からの放射能漏れで、深刻な被曝が続いていることも紹介されてきました。それらを踏まえて、今回、私たちはこの被曝時代の中をいかに生きていったらいいのか、また福島事故による被曝によって、症状が出てくると考えられる中で、差別の問題をどう捉えていくのかなどについてお聞きしたいと思います。

まず、肥田さんが今回見聞きしたお話などからお聞かせ下さい。

入ったものが内部被曝を引き起こしますが、この場合は広島でもすぐに亡くなったり、重症になることはなかったからそういう心配はない。しかし先々、みなさんにとって好ましくない慢性的な症状が起こりうる。起こりうるけれど必ずではない。あと政府や専門家がテレビで言っていることはほとんどがウソです。彼らは一人も被爆者を診ていないし、日本にはまだ被爆者のことを詳しく書いた本もない。彼らが話していることはアメリカが言ったことの受け売りで、ウソばかりだから信じてはダメです」

それでひとりずつ子どもさんを診て、おそらく何日かするとこの症状は自然に治るけれど、小児科の先生にはちゃんとかかりなさい、またご近所に頭を下げて、お宅のお子さんとは遠慮なく聞いて、必要なら一緒に医者さんにかかりなさいと言いました。

原爆投下後の柳井での体験から

肥田 どうも今度ばかりは、内部被曝というと肥田に聞けという事になっていきます。この問題について話せる人がほとんどいない。私は幸いにたくさん症状を診ている。当初は理屈は分からなかったけれど、後に翻訳した本から、そういうものかと理解しましたし、後から出て来る症状は、だいたい年を追ってこうなっていくと頭の中にまとまっています。

それをぜひ詳しく教えてください。

二日経つと動けるようになる。何日か経つとまた発作が起こる。起り方がみんな違いますが、たくさん診ているうちに色々なタイプが自然に頭の中に入ってきた。

印象的なことですが、だるくなるとベッドに寝ていて、調子が良い時は起きて、誰とも話をせずに外に出ていく患者がいました。病室を出ると海に向かう道があり、途中に大きな木とベンチがあって、黙って座っていましたが、だんだん出てくる回数が減り、やがて出てこなくなつて、ある朝、亡くなつていた。担当医師にもなぜか分からなかつたのですが、それが今、アメリカと日本に何百万人もいる慢性疲労症候群の患者とそっくりなのです。アメリカでこの患者の発病から最後の段階まで写したビデオを見たら、様子がまったく同じでした。その患者の病もアメリカの放射線の影響で起こつたのではと疑っています。

内部被曝のメカニズムと医療に問われること

肥田 こうした症状は、今は内部被曝のメカニズムで説明できます。細胞の中でたくさん分子が互いに化学反応を起こして、新陳代謝を行つて命を作っています。それぞれの元素が特有のエネルギーを持っていますが、全部、一〇〇電子ボルト以下。そこに放射性分子が入ってくると、二七〇万電子ボルトもあって、その場をめちゃくちゃにしてしまう。それがかつたるくて動けないぶらぶら病の状態を作りだす。一つ配しているわけですから。

——先程、医師に治療法を教えるべき病院の一つとして原爆病院の名前があがっていましたが、この病院は信用できるのでしょうか。

肥田 まったく信用できません。もともと日赤病院なのですね。政府の予算でやっているのではなく日赤に丸投げして、かかった費用を政府が補填している。日赤には固定の医師がいるわけではなく、大学から三年ごとにパートで派遣されてくる。

広島・長崎の原爆医療研究所、とくに長崎は、敬服する研究をしています。なかでも長崎大学の七條和子さんが被ばく後に入院して亡くなつた方の臓物を丁寧に調べられた。これは広島・長崎の大学で解剖したのですが、全部、アメリカが取り上げてしまった。大事なものだから一つ一つのピンに臓物を入れて、名前を書いて送つたのですが、何年か経って返してもらつた時には、一つのピンの中に五、六人分が混ぜて入れてあった。



アルファ線の飛跡 (長崎大学大学院医学部原研 病理助教・七條和子氏提供)

ところをそれを受け取つた七條さんが、この中で当時のプルトニウムがまだ活動しているかもしれないと考えて調べあげ、一つの腎臓から放射線が出ていふところの撮影に成功したのです(写真)。ノー

一つの細胞が一人前の働きをしなくなり、生命活動がだんだん衰えていく。

——そうした症状が福島でも今後、出て来る可能性はあるのでしょうか。またそれに対して医療ができることは何でしょうか。

肥田 私もそれを一番心配しています。この症状が出てくると、普通のお医者さんには対応できません。一生懸命に検査しても何もでてこない。最後はあなたたは病気ではないとなつてしまふ。その時一人でも、これが放射線内部被曝の症状だと気づく人がいればいいのですが、今の現役の人は広島・長崎の被曝者を診たことも聞いたこともない。

ジャーナリズムの世界にいる人に大きく訴えて欲しいことがあります。政府が予算を組んで、日本中の病院や研究施設とくに広島・長崎の大学病院、原爆医療研究所と原爆病院の医師たちに、原発事故で放射線を浴びたらしい、あるいは内部被曝したらしいと思つている人々が来たら、どうやって対応するか、きちんとした教育をして欲しいということです。

もっと専門的に、より進んだ症状がでてきた時の治療法を、広島・長崎を経験した日本の医師たちが編み出していくべきです。それをサボつてきたのは国の責任だから、国が音頭をとつてやるべきです。これをやらないのなら総理大臣を辞めなさいというところまで新聞にも書いて欲しい。当然のことです。これから深刻な症状が出てくる可能性があるし、今でも鼻血が出たとかあざが出たとか言つて、お母さんたちが心

ベル賞を幾つあげても良いぐらいの大発見です。二〇〇九年六月二六日にNHKが報道し、続いて大新聞が書きました。しかしそれっきり報道が途絶えてしまつた。僕らはみんな、ああ、これはアメリカの手が入つたなと思つていましたね。アメリカはこれが世界中に明らかになつたら困るのです。内部被曝などあり得ないと言つてきたことが全くウソだという学術的証明だからです。

アメリカの被曝の深刻さ

——アメリカが内部被曝を隠してきたというお話がありました、肥田さんの訳された本を読んで、アメリカも深刻に被曝してきたことに衝撃を受けました。また内部被曝は外部被曝と違い、低線量でも人体に深刻なダメージを与えることが隠され、そのため現存する放射線科学自身がかかり歪められたものになつていて、このもとで核兵器開発が多くの国で容認され、原子力発電もよりたくさん国で行われてきたことなどが分かりました。

肥田 そうなのです。『死にいたる虚構』や『内部の敵』という本の中で、アメリカ国内の被曝のことが調べてあつて、政府の発表では、一九五〇年から八九年までの間に乳癌死亡率が二倍に増えてきているのですけれども、最高に増えた郡は四・八倍にもなつていふのです。

このことを『内部の敵』で明らかにしたのが、アメリカ人のジェイ・M・グールドという統計学者で、癌の発生率が上

がった一三〇〇以上の郡に共通する発癌因子を一つずつコンピュータに入力していった。全部に関係する因子が一つだけあって、核施設から一〇〇マイル以内の郡に癌が増えているということでした。グールドは放射線被曝の影響で、乳幼児死亡率や、低体重児出生率が増えたこと、免疫不全が拡大したことなども明らかにしています。

アメリカには原発だけではなく、核兵器の材料のプルトニウムを生産するためのウラン採掘鉱山や濃縮工場などがたくさんあります。ここで放射能漏れが繰り返して起こっていたのですが、軍事機密として隠されてきました。しかも核施設は農場地帯に多く、放射能汚染されたミルクがニューヨークなどの大都市に運び込まれてしまいました。核兵器は相手に使わせないためのもので、持っている分には安全だと保有国は言っていますが、核実験を含めて、核兵器を作る過程でたくさん放射能を出してしまうのです。その上、通常の原発の運転でも、許容量と称して放射性物質が出ており、それも深刻な被曝を引き起こしています。

それからすると今度の事故で、アメリカが日本にいるアメリカ人に福島原発から八〇キロより外に逃げるよう指示したことにも根拠があるわけです。一〇〇マイルは約一六〇キロ。八〇キロはその半部で、より被曝の確実性が高いことをアメリカは知っていたのです。

でも日本でそんなことを言ったら大きな町が幾つも入り、抽出した燐脂肪でつくった細胞膜モデルにエックス線を五八時間、全量三五シーベルトを照射しようやく細胞膜が破壊されることを知りました。ところがあるとき、試験材料を少量の放射性ナトリウム22が入った水に落としてしまった。すると燐脂肪の膜は全量〇・〇〇七シーベルトを一二分間被曝しただけで破壊されてしまったのです。彼は何度も同じ実験を繰り返し、放射時間を延ばすほど、細胞膜の破壊に必要な放射線量が少なくて済むことを確かめました。低線量の内部被曝によって細胞膜が破られ、中が傷つけられるメカニズムを解明したのです。

ノーベル賞に匹敵する大発見でしたが、アメリカはこのペトカウの論文を徹底的に排撃しました。これを認めたら核兵器を作るところか原発の運転も認められなくなってしまうからです。そのため低線量被曝の恐ろしさをまったく無視した放射線学を語り続けてきたのですが、日本の学者の多くも、このアメリカの見解だけを繰り返してきています。

放射能汚染時代をいかなる心持で生き抜くのか

放射線被曝についてお聞きしてきましたが、多くの方がこの時代をどのような心構えで生きていけばいいか思い悩んでいます。私たちはどう歩んでいけばいいのでしょうか。

肥田 一つは放射線の出る元を断ってしまうことです。これが肝心です。

何十万という人口を移さなければなりません。狭い日本にそんな余裕はない。結局、事が起こるとできないことをしなければならぬ原発を五〇基以上も作ってしまったことが咎められるのですが、もともと放射線被曝とはそういうものなのだとこのことを私は翻訳を通して伝えたかったのです。

最初に訳した本はスターングラスの書いた『死に過ぎた赤ん坊』で六〇歳代でした。グールドの『死にいたる虚構』『内部の敵』などを訳したのは七〇歳代。他にも何冊か訳ってきています。開業医のまったくの素人が、米寿を前後してまで、辞書を片手に苦勞してきましたが、最近竹野内真理さんとの方が、放射線関係の医学書などをよく勉強されながら、一緒に訳してくれています。少し前にも一緒に翻訳した三冊目が出ました。「ペトカウ効果」についての本です（人間と環境への低レベル放射能の脅威・ラルフ・グロイブ、アーネスト・スターングラス著 肥田舜太郎、竹野内真理訳 あけび書房）。

——ぜひ、そのペトカウ効果について説明して下さい。

肥田 アブラム・ペトカウ博士は、カナダ原子力公社の研究所で医学・生物・物理学の主任をしていましたが、実験で初めて内部被曝のメカニズムを見つけました。これが「ペトカウ効果」と呼ばれるものです。ペトカウが見つけたのは、内部から出る放射線は、大きなエネルギーは大きな被害を生むという一般の常識とは正反対の働きをすることです。

ペトカウは放射線と細胞の関係を調べていて、牛の脳からそれからお母さんが集まる場で必ず出てくる質問は、もう放射能が入ってしまったようで、症状と思われるものがあるがどうしたらいいかということですが、世界中のどんな偉い先生でもこうしなさいとは言えません。治すためにどうすればいいかは分からないのです。でも私にはアメリカで教わったスターングラス博士が、自分が被曝したと思われる犠牲者にこう伝えなさいと教えてくれたことがあります。どういふことかという、そういう被害をもう受けてしまったのなら、腹を決めなさいということなのです。開き直る。下手をすると恐ろしい結果が何十年かして出るかもしれない、それを自分に言い聞かせて覚悟することです。

その上で、個人の持っている免疫力を高め、放射線の害に立ち向かうのです。免疫力を傷つけたり衰えさせたりする間違った生活は決してしない。多少でも免疫力を上げることには効果があることは、自分に合うことを選んで一生続ける。あれこれつづくのは愚の骨頂。一つでもいい。決めたものを全力で行う。要するに放射線被曝後の病気の発病を防ぐのです。またとても大事なことは食事の食べ方です。食べたものを栄養として腸で吸収するためには、胃袋の中で一定時間滞在させなければなりません。例えば三〇回以上噛めというのは、食物を細かく砕く為ではなく、お米を分解して腸から全栄養を吸収できるように、唾液の中になかなかジースターゼという酵素を十分に混ぜるためです。また飲みこんだ食物が胃の中

にゆっくり留まって、胃液が十分に交じり合う間、二〜三〇分間静かにしていることも大切です。飲みこんですぐ、靴を履いて駆け出すのは、最悪です。ゆくゆく慢性胃炎を招き、果ては胃癌というコースを一心に走るに等しい。緩慢な自殺行為です。早寝、早起きが健康によいのは、大切な朝食の時間を十分に取るための秘訣だからです。

また、ご飯はできるなら家族全部が集まって、楽しくなる話題で食べることも大事です。今、みなさんは放射能汚染されていけない食べ物を得ることにばかり意識を向けていますが、どのように良い食べ方をするのがとても大切なのです。僕はスタンディンググラスから「あなたがそういう良い生活を被爆者にさせる責任があります」と言われました。

一番不幸を背負って、誰にも助けられないことができない広島・長崎の被爆者に、きちんと理屈を説明し、自分の身体を自分で守って放射線の影響と闘って、授けられた寿命いっぱい生きるのがあなたの任務だと悟らせ、勇気を持って生きさせるのが正しい援助なのです。お金やものをあげるのとは邪道だ。本人の生き方を変える。そこまで僕は教わってきました。

これに対して、とにかく心配していろいろなことをする人がいます。しかし例えば野菜は危ないものは買わないという努力で絶対に身を守るのか。しないよりはした方がいい。でも今も福島から放射性物質が出続けています。汚染された食べ物も出回っていて、残念ながら確実に被曝を防ぐ方法は

えなければいけない理由が分からない。そういう疑問の中で人間が小さくなるわけです。

僕はスタンディンググラスに言われた。「そこが大事だ。あなたは悪くない。そういうことを言った人がいたらその前にいつて胸をはって私のどこが悪いのか、アメリカが爆弾を落としたりからこうなった、私が何か悪いことをしたのかと言いなさいと教えなければいけない」と。本人の自覚を高め、人権意識を植え付けることが被爆者に対する一番の援助なのです。

福島の事故についても、差別が今後起こると思います。差別をする側は、差別をしたと思わないで言うのです。もともと無知なのに、分かったような顔をして不用意な発言する人がたくさんいるので、どんなに注意をしても差別は起きます。だから問題は差別を受ける側が、開き直って、私のどこが悪いのだという自分を作ることだと思います。

まずは差別を受ける側が差別に負けない意識を持つことが大切だということです。ただし3・11以降は私たち日本人に住む人々のほとんどがもう被曝していると思います。だから私たち自身がしっかりと人権意識を持たねばならないということなのだと思います。最後に福島の事故の今後を見据えて、若い方たちへのメッセージもお聞かせ下さい。

肥田 僕みたいな人間はどう考えてももうそんなに長く生きていません。広島と長崎で、人類で初めて、本当は作ってはいけないものがある学者がひっぱりだして作ってしまった。

ないので。それよりも原発をやめて放射能の元を断つ方が早い。

——差別の問題はどのように考えたらよいでしょうか。

肥田 その差別の元もアメリカが作ったのです。内部被曝は放射線が身体の中に入っても微量だから病気になるないとマッカーサーが世界中に言ってしまった。核武装を続けるために内部被曝の被害を隠したのです。核兵器が内部被曝によって人を傷つけ続けることが分かると、非人道性が鮮明になってしまふからですが、そのため内部被曝に苦しむ被爆者が、具合が悪いと言っても、誰も分かってくれない状態が生まれました。政府も被爆者に味方しないで、なんでもないので金を寄せせよと言うずうずうしい輩だという姿勢で放置してきた。被爆者が明らかに放射線のために病気になる場合、保障をする法律も作り、頭から原爆を浴びて癌になった人には医療費を出しますよと決めたのですが、後から市内に入って内部被曝した人には、あなたはケロイドもないからと断った。政府が被爆者を外部被曝と内部被曝で差別したのです。

そうしたら今度は心ない庶民の中に、「被爆者と付き合うと病気がうつる」と言いふらして差別する者が現れた。被爆者は被曝したことを話すと就学や結婚や就職の妨げになることが分かり、被曝を隠すようになった。だから結婚するときにも自分の相手に言わないし、子どもにも言わない。でも自分の中にある大きな問題を隠して生きていくのは苦痛で、耐

始末をつける方法も何にも分からないうちに人殺しに使うために。それを未だに正しいと思っている国民がアメリカにたくさんいる状態が放置されています。人類が生き延びていく上で、間違った状態です。だから時間をかけてもあれは間違っていたとアメリカ人に分かって欲しい。そのためには国を越えてよく話し合ってくださいね。

福島原発事故について言えば、先程も述べましたが、みなさん、被曝から逃れるにはどうしたらいいかと一番聞きたがります。私は厳しいかもしれませんが、今も放射能が出ています。完全に逃れるのは不可能だとお話ししています。開き直って免疫力を上げよと言いましたが、広島・長崎でも実際にそうして生き延びてきた被爆者がたくさんいるのです。

放射能の問題は福島原発だけのことではないのです。今運転している原発も、許容量と称してそれぞれに放射性物質を出しています。それなのに安全で心配することはないと言われて、みなさん、騙されてきたのです。私は翻訳を通じて、アメリカの核施設から一六〇キロ以内で乳癌の死亡率が高くなっていることを紹介しましたが、日本はほとんどの地域が原発から一六〇キロ以内です。だから自分のやれることだけやって自分と自分の子だけ助かろうとしてもダメなのです。

みんなで放射能の出る元を断って、放射能から逃れる努力などする必要のない世の中を目指すことが大切です。

——ありがとうございます。